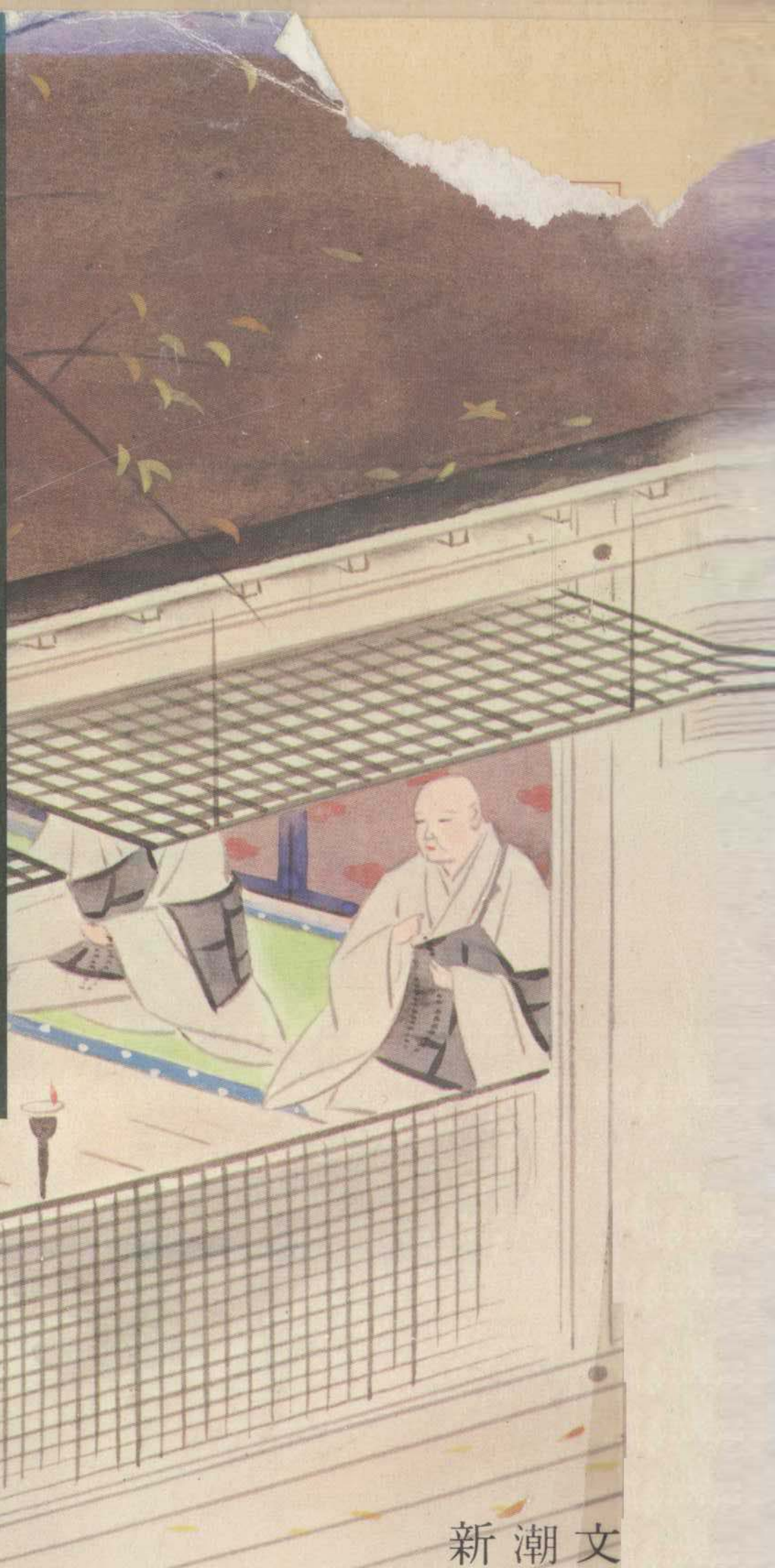


親鸞(一)

叡山の巻

丹羽文雄



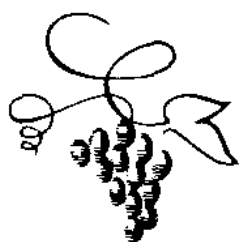
新潮文

しん
親

らん
鸞 (一) 叡山の巻

新潮文庫

に - 1 - 14



昭和五十六年九月二十五日 発行
平成元年八月十日 十一刷

著 者 丹 羽 文 雄
に わ あ お

発行者 佐 藤 亮 一

発行所 株式会社 新 潮 社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 業務部(〇三三二六六一五一一)
編集部(〇三三二六六一五四四〇)

振替東京四一八〇八番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・錦明印刷株式会社 製本・錦明印刷株式会社

© Fumio Niwa 1981 Printed in Japan

ISBN4-10-101714-X C0193

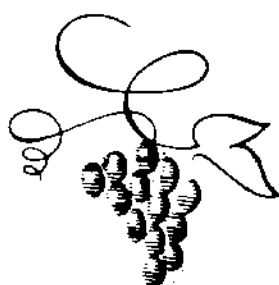
新 潮 文 庫

親

鸞

(一) 叡山の巻

丹 羽 文 雄 著



新 潮 社 版

2764

目次

今昔物語	七
末法の世	四
先驅者たち	九
源平闘争	一六
叡山に上る	三〇
動乱止む	三三
疑惑	四四
盛衰	三八

念仏者の変遷……………三六

山を下りる……………三三

親

鸞

(一)

叡
山
の
卷

今昔物語

年のころ三十ばかりの、背の高い、赤髭あかひげの、見るからに岩乗がんじようそうな男が、とある町を歩いてた。いかめしい築地ついきの邸やしきがしばらくつづいたあと、土塀どへいの崩れた邸と変り、そのあたりから空地が多くなつた。それから先には、低い板葺いたがきの家が並んでいた。空地がぼつぼつあらわれるあたりは、人通りがなかった。夕暮どきであつた。

ふと、鼠のように口を鳴らしたものがあつた。男は声の方をふりかへつた。はじめは崩れた土塀の中かと思つた。土塀の中には、子供のおそんでいる気配があつたが、鼠鳴きがそこからはうけとれなかつた。男は通りすぎようとした。すると、また鼠のようにだれかの口が鳴つた。男は、立ちどまつた。男が立ちどまつたときに、土塀の崩れたわれ目から男の子の顔がのぞいた。五つぐらいの顔であつた。目尻が裂けたように吊り上つた、利口そうな顔であつた。竹馬あそびの最中であつた。葉のついた一本の生竹に手綱に擬した綱をつけて、それを小股こまたにはさんで走りまわっていたところである。子供は無心に、男を見た。男が立ちどまつたので、子供はふと表を見る気になつたようである。鼠鳴きは、この子供ではなかつた。子供の声ではなかつた。大人の、しかも女の声だつたと思いかえしていると、また鳴つた。

鼠鳴きは、男を相手にしていた。男の気をひくためであつた。男はあたりを見た。となりの門

のある崩れた土塀越しに、家屋がながめられた。その半部はじとみに動くものがあつた。それが手招きをしていた。男は門に近付いた。

「わしを呼んだのか」

若い女の声があつた。

「お話したいことがあります。その戸はしめてありますが、押せば開きますから、そこを押してはいつて来て下さい」

思いがけないことだつた。男は戸を押してはいつた。女がすがたをあらわした。

「その戸を閉めて下さい」

いわれるままに男は、戸に鍵かぎをかけた。

「お上り下さい」

男はかくべつ用心をするふうもなく上つた。簾すだれの中にはいると、調度品はほどよくととのつていた。女は二十ぐらいで、目鼻立ちのはっきりとした顔であつた。この家には、女がひとりだけらしい。女は鼠鳴きをしたときから男に関心をもっていたらしく、ほほ笑みながら男を見ていた。かくべつ世間話をするでもなかった。何故なぜ自分を呼んだのかと訊きくでもなかった。男は、そばににじり寄つた。女がそういう雰囲ふんいきをつくつていたからである。

男は、侍ふうであつた。侍といえ、一種の無頼漢で、殺生せつしょうを何とも思っていない人種である。女はそういう男であることを承知の上であつた。

大した語らいもなく、ふたりは感情のおもむくままに男女のまじわりを持つた。

この家には、ほかにだれもいなかった。いったいこれはどういう家か。しかし、そのことを気に病むような男ではなかった。それよりもいったん結ばれてしまうと、女がいとしくてならなかった。女もまた、男が自分の思いどおりになってくれたので満足であった。ふたりは、日が暮れるのも気づかず、横になっていた。

日がとっぷりと暮れたころ、だれやら門を叩くものがあつた。

ほかにだれもいないので、男がいった門をあけると、侍ふうの男がふたり、女房らしいのがひとり、それに下女をつれてはいつて来た。かれらはあらためて男に挨拶をするようすもなく、勝手に^{しとろ}蔭を下ろしたり、灯をともしたり、おいしそうな食物を銀の食器にいれて、男と女にすすめた。男は不思議に思った。自分の家のようにかれらは心やすく中にはいつて来て、この自分で食事をすすめる。もしかしたら、れっきとした良人^{おと}があるのではないか、と気をまわしたが、はらもすいていたので、遠慮なく食べることにした。女は、それがあたりまえというふうに食べていた。男に対して、かれらのことを説明しようともせず、夫婦らしく食事をすることに気を奪われているようすであつた。

食事が終ると、女房らしい女があと片づけをすませて、みんな出ていった。そのあとで、女は男に戸締りをさせて、寝ることになった。

夜が明けると、また門を叩くものがあつた。男がいつて開けてやると、昨夜の男女とは顔のちがつた男女がはいって来た。蔭をあけたり、家の中の掃除をはじめた。しばらく経って、粥^{かゆ}や蒸した飯などをはこんで来て、ふたりにすすめた。ひきつづき、昼の食事も持って来て、それが終

ると、かれらはどこかへ消えさった。

こうして二、三日が過ぎた。

「どこかお出かけになりたいところがありますか」

女が訊いた。男は心をみすかされたように思ったが、

「ちょっと知ったひとのところに出处けてみたいと思つてたところだ」

まるまる心を許していたわけではなかった。

「それでは、早いとお出かけなさい」

しばらく経つて、水干すいかんをきた雑色ぞうしきが三人、みごとな馬にそれにふさわしい鞍くらを置き、馬の口

取の小者をつれてあらわれた。家の裏手に壺屋つぼや（物置）めいた建物があつて、女がその中から立

派な装束を出して来たので、男はそれを着ることになった。男は馬にのり、従僕を従えて出かけ

たが、この男たちはよく気が利いて、手足のように動いてくれた。男は知人を訪ねたが、自分が

現在置かれてゐる夢のような事情を話すわけにいかなかった。雑色が話の聞えるところに控えて

いたからである。それにまた、身にさしせまって危険があるというのでもないので、男は本心で

ないことを語らい、帰途についた。知人は、雑色や馬の口取までかかえている男の境遇におどろ

いたが、わけを訊くひまがなかった。家にかえると、馬も従僕も、かくべつ女が指図したようす

もなかったのに、消えてしまった。食事の支度など、いちいち女がいつけているようすもない

のに、その時間になると、どこからともなくはこばれるのであった。

こうして何不自由なく、二十日ばかりが経った。女が男にいった。

「思いもかけず、こうしてふたりでくらすようになったのも、前世からの定めごとであったと思います。こうなるからは、生きるも死ぬるも、いっしょでございます。私のいうことに否いなやはございますまい？」

「お前のいうとおりだ。生きるも死ぬるも、お前次第だ」

「うれしゅうございます」

女は頭を下げた。

男に食事をあたえ、女は奥のはなれに男をつれていった。昼のあいだはいつものことだれもいなかった。

そこへいくと、にわかになさしかった女の態度が一変して、高飛車になった。先まず、男の髪を縄でしばった。

「私のいうとおりにして下さい」

刑罰に使う機物はたものにはりつけに縛りつけた。きれいな女の顔に、殺氣がこもった。それが凜々りりしい美しさになった。女はきはきとことをはこんだ。男の両足を曲げてくくりつけ、背中をはだかにむいた。男は、おとなしくされるままになっていた。女は烏帽子えぼしをかぶり、水干袴ぼかまをつけて、男のような格好になった。そして、笞むちを手にした。女の顔は、緊張した。女は笞をふりあげ、情け容赦なく、つづけさまに男の背中を打った。はなれの中で、やわらかで、皮鞭かわむちを鳴らすような、部厚い手ごたえの音がつづいた。女の顔は、紅潮した。女の目が兇暴きようぼうに光った。男ははじめの間、がまんをしていた。笞が肌にくいこんだ。たかが女の笞とも思われなかった。男は、うなった。

苦痛にたえかねた悲鳴でなく、苦痛にたえしのぶ男らしいうめき声であった。

八十ほど、女は打った。

「痛かったかしら」

「なに、大したことはない」

男は負惜しみをいった。

「そういうお方と思ってました」

女は縄をといた。そして、窯かまの土を煎せんじて酢にまぜたものを飲ませて、土をよくはらい、そこに寝かせた。二時間ばかり経ってから起してやると、男はいつもの元氣をとり戻していた。よくよく不死身に出来ていたようである。が、それからあとは、ふだんよりも滋養のある食事を男にすすめた。

こうして十分養生させると、答で打ったあとともほほとどおりに癒なおった。それから三日ほど経つと、また前とおなじようにはなれにつれていって、おなじ機物にしばりつけ、前とおなじように答で打った。女は、すこしも手加減を加えなかった。打につれ、皮は裂け、血が流れた。前のときよりはこたえたはずであった。かまわず、八十回ほど打ちのめした。

「がまんが出来ますか」

女が訊いた。男は顔色も変えず、

「なんの、これしきのこと」

女は前のときよりもいっそう男のがまんの強さをほめた。女自身、これほどとは思っていなか

ったようである。女は、しごく満足であつた。女は十分に男をいたわつた。

さてまた、四、五日が経つと、おなじように答で打つた。それにもやはり、

「何の、これぐらいのこと」

といったので、今度は仰向けにして、腹のところを打ちのめした。答のあとが、みみずばれとなり、たちまち血がにじみ、その上をたたきつけられるので、皮膚がひき裂けた。男は血まみれになつた。それでも、

「何、大したことはない」

落着いた声で男はいつた。女はたいそう男のがまん強いのをほめた。そのあとは、手厚く介抱をした。仲間にするための試験にしては、慎重なやり方であつた。

ある夕方であつた。女が黒い水干袴と、立派な弓、矢筒、脚絆、藁沓を出してくると、男に身支度をさせた。

「これから蓼中の御門のところにいって、そつと弓の弦を鳴らして下さい」と、女がいつた。

「すると、それに答えて、おなじように弦を鳴らすものがあります。口笛を吹くと、やはり口笛で答えるものがあります。その方に歩みよると、だれかと訊かれるでしょう。あなたはただ、来たと答えばよいのです。そこでその男のあとからついていって、いわれたとおり、命じられたところで立番をして、中から人が出てきて邪魔をしたら、精いっぱい戦つて下さい。仕事が終われば、一同は船岳の麓へいって、その日の獲物を分配することになるでしょう。だけど、分け前をくれるからといって、決して受け取ってはなりませんぞ」

ていねいな説明であつたが、口調の中には有無をいわせないきびしいものがあつた。「そなたのいうとおりにするよ」

男はいわれたとおりに出かけていった。すると、説明にあつたように男は門の中に呼び入れられた。見ると、似たような黒装束のものが二十人ばかり立っていた。無言である。その群れからすこしはなれたところに、背の低い、色白の男が立っていた。ほかの男たちが、その男には一目も二目もおいていようすが男に感じられた。頭目かと思えた。そのほかに、下人が二、三十人あまりもいるようであつた。

かれらは手筈をととのえ、一団となつて京の町中にはいった。大きな屋敷の前になると、二十人ばかりの人数を二、三人ずつに分けて、その付近の手剛てごうそうな家々の門に立番させた。のこり全部が一気に、めざす屋敷に乱入した。男の腕前をためそうと思つたのか、中でもとくに手剛てごうそうな家の門に割りあてられた人数の中に、その男は加わっていた。乱入と同時に、屋敷の中から叫喚がおこり、建物がこわされるような物音がつづいた。夜盗と知って、隣家から援助にとび出してくる侍があつた。侍たちは、先ず矢を射た。例の男は奮戦した。相手方を射とめ、またあたりで戦っている味方の働きにも目をくばつた。

取れるだけのものを奪い取ると、潮がひくように一団はひきあげた。あとには静寂と断末魔のうめき声のこつた。一団の行動は敏捷びんしょうだった。足音をたてなかつた。風がとおりすぎたようであつた。一団は、船岳の麓にたどりついた。そこで、獲物の分配が行われた。男にもくれやうと、いうのを、

「わしには獲物はいらぬ。こうしたことを習いおぼえるだけで、結構だ」

男が断わると、首領と思われる、すこしはなれて立っていた色の白い小男が、満足そうにうなずいた。

一団は分れ分れに、立ち去った。たがいに話合うこともなかった。獲物をかかえて、自分のうしろを歩いていったひとり、男の気がつかない内に消えた。男は、家に戻った。

女は風呂をわかし、食事の支度をして待っていた。何ごともなかったように女は、平静な顔をしていた。さきほどの首領が女性であることを、男は見破っていた。目の前の女とどこか感じが似ていると思った。不可解なことばかりのこの家のことである。船岳の麓で別れたが、女が一ト足先にこの家に戻ることぐらいは、たやすい芸当であった。それとも、あの首領とは姉妹か。しかし、男はそんな疑問を顔にも出さなかった。ゆっくりくつろいでから、ふたりは寝た。盗賊の仲間にはいったとわかったが、女をうらみには思わなかった。

男の夜の出勤が、七、八回に及んだ。あるときには、男は太刀をふりかざして、めざす屋敷に乱入した。そして、めざましい活躍をした。あるときには、弓矢をもって、外に立っていた。出勤の前に女がいちいち指図をした。男はよく働いて、女の期待にこたえた。

「私の目に狂いはなかった」

女が満足そうにいった。

「わしはまだ十分力を出しきっていないぞ」

男は、ますます女がいとしくなった。